

日本語学習者を対象とした書道活動の提案

－ COVID-19 禍前・禍中・禍後の
学生アンケートと教員の気づきを通して －

林 朝子・シューショートケオ・サランヤー

**Proposal of Calligraphy Activities for Japanese Language Learners
－through student questionnaires and teacher observation before, during,
and after the COVID-19 pandemic-**

HAYASHI Asako, CHOOCHOTKAEW Saranya

〈Abstract〉

This article covers face-to-face and non-face-to-face calligraphy activities (using brush brushes, brush pens) conducted for Thai Japanese language learners before, during, and after the COVID-19 pandemic. Based on the questionnaire of the participating students and the observation data of the teachers, we will clarify 1) changes in the attitude of the students toward calligraphy, 2) changes in teachers' guidance and support, due to face-to-face and non-face-to-face implementation. And we will propose the future of calligraphy activities that will play a role in learning characters for Japanese language learners and passing on character culture.

キーワード：対面・非対面、書道、毛筆、筆ペン、タイ人日本語学習者

1. はじめに

2019年に発生したCOVID-19の影響で日本語教育の在り方が大きく変化した。筆者は2008年よりタイ人日本語学習者を対象に書道活動の実施を継続している。書道は実技を伴う活動であり、従来、対面実施が当然とされていたが、海外への渡航が困難となり、書道活動においてもオンラインを活用した非対面実施の可能性を模索する必要があった。本稿では、COVID-19 禍前中後にタイの大学の日本語学習者を対象に行った対面・非対面による書道実践（毛筆、筆ペンを使用）5回を取り上げ、参加学生のアンケート回答と実施教員（日本人教員・タイ人教員・日本人支援教員）の観察による気づきを基に、対面・非対面の実施による学生の書道に取り組む姿勢、教員の指導や支援の共通点・相違点等を明らかにし、日本語学習者への文字学習と文字文化の継承を担う書道活動の今後のあり方を提案する。

本実践はタイの大学の日本語専門科目「現代の日本伝統文化」の一部に位置づけられて

おり、授業担当のタイ人教員と書道を担当する日本人教員との連携で実施されている。授業の履修学生はタイ語を母語とする日本語専攻または日本語副専攻の学生である。

2. 日本語教育における書道実践

日本語学習者を対象とした書道実践は、短期の体験型も含めると、国内外である程度で行われていると思われるが、論文等で確認できる報告は少なく、具体的な活動内容を把握できる実践は限られている。

福光（2005、2020）は日本国内の大学で日本語学習者を対象に半年から 1 年の授業として書道実践を行っている。指導内容は小中学校書写のレベルから最終的には芸術的な書道表現にまで展開されている⁽¹⁾。

馬場（2019、2021）も日本国内の大学において、日本語学習者を対象に書道を授業に取り入れている。馬場（2019）では、筆ペンを使用した漢字語彙学習を行っており、筆ペン使用をきっかけとして学習者の関心を書道へと向けている。馬場（2021）では、日本語文化理解の一環として書道実践を行い、文字が芸術へと昇華することを学習者が体験的に学ぶ取組を行っている。

林（2008、2010、2011）は非漢字圏であるタイの大学で日本語を学ぶタイ人学生を対象に筆・筆ペンを使用した実践を取り上げている。筆・筆ペンを使うことで、漢字の点画やひらがなのやわらかい画、字形や配置等に広く意識が向けられていることを明示している。

また、日本語学習者を対象としたオンライン活用の書道実践は、林・シューショートケオ（2022）に見られるだけである。タイ人学生を対象としたオンライン書道実践を報告しており、オンラインでの書道実践の課題を学生側と教員側から指摘している。

3. 実践内容

本稿では 2020～2023 年にタイで実施した 5 回の書道実践を取り上げる。

実施教員）日本側：日本人教員 1 名（書道、日本語教育）

タイ側：タイ人教員 1 名（日本文化、日本語教育）

日本人支援教員 1 名（言語学、日本語教育）

対象者）タイ国チュラーロンコーン大学文学部

日本語専攻または副専攻の学生 20～40 名程度

日本語レベル：日本語専攻は N1～N2、副専攻学生は N3 程度

既習漢字数：日本語専攻は 1500～2000 字、副専攻は 300～500 字程度

大学時留学経験：3 割程度有り

書道経験：4 割程度有り

高校・大学での日本留学時・日本語学校・高校での文化体験が中心

筆文字を見た経験：8 割程度有り

書道体験時、タイや日本での店の看板、ドラマ・アニメ・漫画の背景等

書道経験のある学生は 4 割程度を占めるが、漢字一文字を書く程度の非常に限られた内容である。学生は書道で使用する筆・墨・紙の扱いに慣れていないため、教員 3 人体制で実施している。日本人教員は日本語のみを使用するが、日本語主専攻学生と副専攻学生の日本語能力に差があるため、タイ人教員は適宜最低限のタイ語による通訳も行っている。筆文字を見た経験がある学生は 8 割程度と高い。タイのデパート等にも日本食レストランの看板が見られ、また、学生が関心を持つポップカルチャーの中でも筆文字を見る機会が多いようである。



図 1 タイにある日本食レストランの看板

活動の目的)

- ① 筆や筆ペンの筆記具を使い、文字を書くことにより、日本語の文字への意識を高め、手書きする際の整え方を知る機会とする
- ② 日本の文字文化を体験する
- ③ 発展として、書道文化への関心へつなげる

活動目的として 3 点を設定している。①は小学校中学校国語科書写の毛筆の在り方である「毛筆を使用した学習は硬筆による書写の能力の基礎を養うよう指導すること」⁽²⁾に基づき、毛筆で様々な点画を書くことにより、点画の書き方がさらに確実となることを目的としている。また、毛筆で文字を大きく書くことで、字形への意識が向き、字形の整え方

への理解も深められる。

基本的な活動の流れは以下となる。

活動の流れ)

15 分 準備

15 分 日本語の文字の歴史・書道の紹介・姿勢や筆の持ち方等の説明

50 分 基本練習→単体文字の練習

10 分 休憩

30 分 複合文字の練習

35 分 活動

対面時：扇子や色紙に好きな文字を書く、書初め用紙に書く等

非対面時：「変な漢字」ゲーム

25 分 片付け・アンケート回答

毎回の活動内容は多少変化するが、基本練習→単体文字の練習→複合文字の練習という流れは筆、筆ペンの運びに慣れる練習でもあり、基礎練習として毎回取り入れている。

今回対象とする 5 回の実践の時期、実施方法（対面・非対面）、使用筆記具（筆・筆ペン）、参加学生数は以下となる。なお、非対面では zoom を用いてオンライン実施を行った。

実施時期		対面・非対面	使用筆記具	参加学生数
コロナ禍前	①2020 年 2 月	対面	筆	42 名
コロナ禍中	②2021 年 4 月	タイ側対面・日本側非対面	筆	41 名
	③2021 年 11 月	非対面	筆ペン	21 名
	④2022 年 4 月	非対面	筆ペン	30 名
コロナ禍後	⑤2023 年 2 月	対面	筆	29 名

本稿で取り上げる 5 回の実践は、コロナ禍前 1 回、コロナ禍中 3 回、コロナ禍後 1 回である。また、考察で使用するデータは学生アンケートと教員観察による気づきである。アンケートは、日本人教員が実施した日本語によるアンケート、タイ人教員が実施したタイ語によるアンケートの 2 種類である。なお、以下では、5 回の実践を、コロナ禍前を①、コロナ禍中を②③④、コロナ禍後を⑤と記す。



図2 対面での書道実践

4. 学生アンケートと教員観察から見えたこと

4-1. 日本語によるアンケート

ここでは、日本語によるアンケート結果を教員観察による気づきも踏まえ、考察する。

4-1-1. 筆記具による文字・書字への関心

筆記具の筆・筆ペンの使用による文字・書字への関心の度合いを見るため、アンケートでは筆・筆ペンを使用し文字を書いた際に「線・形・大きさ」の中で注意したことを問い、表1はそれぞれを選択した学生の割合である。なお、実践③④⑤では複数回答となっており、合計が100%を超えている。

筆・筆ペンという筆記具に関わらず、書字の際、線に意識を向けている学生が最も多い。

表1 筆記具と文字・書字への意識の割合

筆記具	線	形	大きさ
①筆	79%	18%	3%
②筆	66%	24%	10%
③筆ペン	81%	52%	4%
④筆ペン	89%	43%	3%
⑤筆	82%	41%	8%

筆・筆ペンで線を十分に表現するには「始筆→送筆→終筆」という一連の流れを押さえて書く必要があり、文字の画一画を丁寧に書くようにしていた様子が見える。

また、自由記述による活動の感想でも筆・筆ペンへのコメントが多く見られた。「力加減が難しい」「コントロールが難しい」という「筆圧・把持」への記述があり、不慣れな

筆記具の扱いが難しいようであった。筆圧と具体的な線については「太さのコントロールが難しい」とあり、太さに変化が出せる筆・筆ペンの特徴を感じつつ、扱いに苦労している様子も見られた。また、筆・筆ペンと普段使用しているペンを比較し、その違いに触れているコメントもあった。「持ち方がペンより立てる」「ペンは一点だけ接するので注意しなくてよい」「ペンは線や止めを意識しない」とあり、筆・筆ペンとペンを比べることにより、筆・筆ペンによる書字や表現で注意を向けるべき点が認識できていた。その他に、「書く順を気にする」「順を間違ったら字が汚くなる」など、線を組み合わせ、形を整えていくための筆順の役割にも気づけているコメントもあった。

4-1-2. 対面・非対面のメリット

書道活動の対面・非対面のメリットを学生側と教師側の立場から分析した（表 2）。学生へは各活動についての感想を自由記述で書いてもらった。実践②はコロナ禍中に入っただけで、タイ側は対面、日本側は非対面の実施となったため、タイ側の対面に関するコメントは対面に含め、日本側の非対面に関するコメントは非対面に含めた。表の（ ）は学生のコメント数である。

表 2 対面・非対面のメリット

	メ リ ッ ト	
	学 生 側	教 師 側
対 面	ーわからない時、すぐ先生に聞ける（42） ーとなりの友達におしえてもらえる（37） ー友達と一緒に書ける（33） ー墨の不足などにすぐ対応してもらえる（21）	ー学生への対応がその場でできる ー直接指導できる ー学生の座り方や姿勢、筆の持ち方をチェックできる
非 対 面	ー先生の画面が大きくて、見やすい（37） ー複数のカメラがあり、筆の持ち方がよく見えた（11） ーカメラの角度がよく、対面授業のようだった（6） ー先生が友達に教えた内容を他の人も聞ける（9） ー一人で集中できる（7）	ーZOOM で学生全員の作品を同時に見られ全体像がわかる

対面のメリットとして学生から多く挙げられていたのは、「先生にすぐ聞ける」「友達と一緒に書ける」というコメントである。対面での活動では、学生同士が書いた作品をお互いに見せ、書き方を確認し合う、感想を伝え合う、鑑賞し合う様子が見られ、自然な形で協働学習が行われていた。また、教師側の対面の大きなメリットとしては「学生への対応がすぐその場でできる」ことである。筆を使用した際、活動前に確認できていなかった左利きの学生がいたが、その場で教員が左利きで書く際の工夫などについて対応ができた。

対面では、学生の様子を見て、困り感を把握し、すぐに直接指導ができるという大きなメリットがある。

非対面のメリットでは、学生側から「見やすい」というコメントが多かった。オンラインで指導する際、カメラ3台（手元を上から映す・横から映す・正面から教員を映す）を用いる工夫により、筆を持つ手元を映す角度が上と横からになり、目の前で実際に見ているような感覚になり、筆の持ち方や実際の運筆もイメージしやすかったのであろう⁽³⁾。教員側はPCを2台用いて、1台をzoom画面共有で使用し、もう

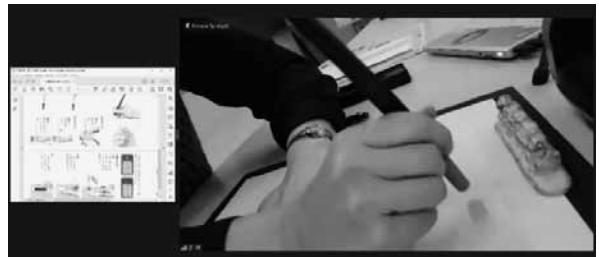


図3 非対面時のオンラインの様子

1台をzoomギャラリービューで参加学生全員が表示されるようにした。学生には書いた作品を自分のカメラに向けて見せるように指示し、同時に学生全員の作品を見ることができた。学生の中には、自分が書いている手元を映せるようにカメラを設置している者もあり、筆ペンの持ち方や角度なども確認することができた。

その他に、学生には「一人で集中できる」というコメントも複数見られ、自分のペースで集中して筆・筆ペンに取り組める環境が作れる点が非対面のメリットと言える。



図4 非対面時オンラインで学生の文字を確認

4-1-3. 対面・非対面のデメリット

次に、書道活動の対面・非対面のデメリットを学生側と教師側の立場から分析した（表3）。

表 3 対面・非対面のデメリット

	デ メ リ ッ ト	
	学 生 側	教 師 側
対面	－周りが気になり集中できない (5)	－学生の作品を一度に把握することができない
非対面	－相談できる先生、友達がいない (24) －先生に聞きにくい (14) －先生に作品を見せることが難しい、確認できない (15) －カメラの切替についていけなかった (7) －紙やインクが補充されず、十分な練習ができない (8) －PC 画面が小さく見にくい (4) －書く場所、机が無かった (3)	－学生の座り方や姿勢、筆の持ち方をチェックできない

対面・非対面のデメリットは先述したメリットの裏返しになる内容が多いが、まず学生側の対面のデメリットとして「集中できない」というコメントがあった。一方で非対面のデメリットとして「先生に聞きにくい」「友達と話せない」のように「孤立感」を感じるコメントが見られた。教師側のデメリットとしては、対面では PC 画面上のように一度に作品を把握することが難しいことが挙げられる。非対面では実際に学生がどのような姿勢や筆・筆ペンの持ち方をしているのかが確認できず、指導へ結びつけるのが困難であった。

非対面でのカメラ 3 台の使用についてはメリットが多かったが、学生側のデメリットとして、カメラの切替や説明のスピードに付いてこられなかったことが挙げられる。また、PC 画面の大きさや書く場所の確保など学生の学習環境、紙や筆ペンのインクの使用状況（筆ペンのインクボトル部分を強く押し、一度に多くのインクを出してしまった学生がいた）によって、活動の充実度に差が出てしまったと考えられる。

非対面で学生が感じる孤立感を軽減するため、zoom ブレイクアウトルーム機能を使用し、グループ活動でカタカナの言葉を表す漢字を作る「変な漢字ゲーム」⁽⁴⁾ を取り入れた（図 5）。林の所属大学である三重大学学生も「変な漢字」を作成し、双方の学生がお互いに作った「変な漢字」を読み合う、漢字での交流を行っ



図 5 変な漢字ゲーム：学生が作った漢字例（クリスマスとカラオケ）

た。この活動についてのコメントには、「オンラインでの交流ができた」「一人の孤独の感じが減った」「友達と話す機会ができて嬉しかった」など、友達とのつながりを感じている様子がうかがえた。非対面で書道活動をする場合、一人で慣れないことに取り組む中で不安や孤独を感じることもあるが、グループ活動を通して一緒に学んでいるつながりを作れ、非対面だからこそ楽しく取り組めた活動とも考えられる。

4-2. タイ語によるアンケート

ここでは、タイ語によるアンケートから、筆・筆ペンの使用に共通するコメントと筆使用に特化したコメントを取り上げる。学生のコメントに教員観察による気づきも踏まえ、明らかになったことをまとめる。

4-2-1. 活動が「楽しい」理由

書道活動についての学生の自由記述で多く見られたコメントが「楽しい」であった。実践②の際にはタイ語によるアンケートを実施することができなかったが、日本語アンケートでは書道活動を「とても楽しい」「楽しい」の選択肢を選んだ回答が100%であった。

表4 「楽しい」と答えた割合 筆・筆ペンの使用筆記具に関わらず、活動を「楽しい」と感じている学生が多かったと言える。

	「楽しい」
①	73%
③	90%
④	83%
⑤	90%

筆・筆ペンの使用に共通した「楽しい」理由としては、「筆・筆ペンで文字を書けたこと」に対して「新しいことへの挑戦」「自分の成長」「自分の作品に満足」と感じ、「感動した」「自信や誇りを持てた」という記述が見られた。また、「道具の充実」に触れているコメントもあった。筆・筆ペン、半紙、資料プリントは全員に配布したことから、「後から自分で練習したい」とする学生もいた。資料については「紙で見やすかった」というコメントもあった。非対面の際にはタイ人教員が全学生に個別に筆ペン・資料プリントを郵送する必要がある、その対応については負担が増えていた。

「楽しい」理由として、筆を使用した実践①⑤では、筆ペン使用では見られなかった理由が2点挙げられていた。1点目は書道文化や書道具に触れられる筆体験自体が「楽しい」としている点である。伝統的な筆、墨、紙、文鎮、下敷きを使用できることに嬉しさを感じていたようである。2点目は、筆を使用することで「心が落ち着く」「穏やかな気持ちになる」「集中できる」「メディテーションになる」といった、一心に筆で文字を書くことで気持ちを落ち着けられていた点である。

4-2-2. 芸術的な面と日本人の美意識への関心

芸術的な面と日本人の美意識に触れられたコメントは実践①⑤の筆を使用した活動時のアンケートにのみ見られた。

まず、芸術的な面についてのコメントである。「普通の漢字なのに書道にするととてもきれいに見える」「美術的で印刷よりかっこいい」「線が太かったり、細かったり、とてもきれい」など、毛筆表現によりペンやシャープペンシルなどで表すことができない太さの変化やかすれなどに気づき、その表現に芸術的な感覚を持っていたのであろう。「自分の作品を壁に貼って毎日見ていると心が落ち着く」というコメントもあり、表現に幅のある筆で書かれた文字を活動後も継続して味わっているコメントも見られた。活動では楷書を取り上げたが、活動の導入で書道の歴史に触れる際には他の書体（篆書・隸書・草書・行書・仮名）も紹介しており、楷書以外の書体にも興味を持ち、書道表現の広がりを感じているといえるだろう。

次に、日本人の美意識に触れられているコメントである。「日本人が「きれい」と感じる字はどのような字か」「日本人の目線で美意識が知りたい」「日本人にとってどんな線がきれいなのか気になる」など日本人が書道や文字に対してどのように感じているのかを知りたいと思っているようである。日本で現在まで継続されている書道を通して、日本文化を背景とした日本人の美意識へ意識が向いていたのであろう。

5. 今後の書道活動に向けての提案

コロナ禍前中後に実施したタイ人日本語学習者への対面・非対面書道実践での学生アンケート結果と教員の気づきから、対面・非対面のメリット・デメリット、使用筆記具（筆と筆ペン）による学習者の関心内容の共通点・相違点を中心に考察を行った。考察を基に、今後の日本語教育での書道活動の在り方、また、その可能性について提案をしたい。

まず、書道活動は対面・非対面でも実施は可能であるが、その活動目的によって使用する筆記具、筆か筆ペンを検討する必要がある。文字の点画、字形など書字に着目すると、筆・筆ペンの使用で同程度の意識付けが可能である。しかし、文字表現の広がりや日本文化的側面を意識するためには、筆の使用が望ましい。

次に、充実した活動を行うには、使用用具の準備が必要となる。実際の筆や筆ペン、硯や半紙等を使用し書字することで、その筆記具の特徴を体験でき、点画の書き方や字形の整え方にも意識を向けられる。日本国内であれば、用具を揃えやすいが、海外ではインターネットで購入するなど対応が必要となる。ネット購入では筆の状態を確認するなど、事前の準備に時間を要するであろう。また、配布資料などは紙の配布が望ましい。書字をしている紙の横に資料を置くことができ、目線を同じ面に向けられ、視線の移動に負担が少なく、書くための情報を把握しやすいと言えるだろう。

さらに、非対面のオンライン実施の場合は、複数台のカメラ使用が望まれる。教員の手

元を上と横からの角度での映すことで、筆や筆ペンの持ち方や運筆が学習者に十分イメージができるようになる。その他、オンライン実施の場合、学習者の ICT や使用可能な机等があるかなど、学習環境の確認が重要であり、筆ペンのインクの扱い方など、細かな点まで考慮し、対応が求められる。

そして、対面での活動では自然と学習者同士の協働学習につながる傾向も見られた。学生同士が点画の書き方を教え合ったり、書いた作品を鑑賞し合ったりしていた。対面では教師側が学習者全員の書く様子を一度に把握することは困難であるが、協働学習を通して、適切な運筆や表現に近づけられていた。書道の場合、個人練習の時間が多くなりがちであるが、互いに働きかけ合いながら学ぶことができていた。オンラインであれば、必然的に個人練習の時間が多くなるため、全員の作品を PC 画面上で共有する、グループ活動を取り入れる等の工夫が必要であろう。

以上、コロナ禍前中後の対面・非対面による書道実践を通して見えた今後の書道活動のあり方を提案した。日本語教育における書道の位置づけは、文字を整える側面と芸術的な側面の 2 点を中心であるが、どの側面を重視するのかによって、用具とその使い方の検討が求められる。また、現在ではインターネットを活用し、日本国内外でも書道文化を広げることが可能であり、更なる効果的な書道活動の実施に向けての示唆ができたと思う。今後も継続して、日本語教育での書道活動のあり方について実践的な探究に取り組んでいきたい。

謝辞

本稿は第 13 回国際日本語教育・日本研究シンポジウム（2023 年 11 月 18 日・19 日開催、香港大学專業進修学院・香港日本語教育研究会主催）での発表に加筆したものである。発表の際、貴重なご意見やご教示をいただきました。また、本実践の実施、本稿執筆において、チューラーロンコーン大学文学部非常勤講師の池谷清美先生から多大なご協力とご教示をいただきました。深謝いたします。

注)

- (1) 授業実践を基に日本語学習者を対象とした書道教材『留学生のための書道〈入門編〉』（大阪外国語大学留学生日本語教育センター、2004）を作成している。本実践でも指導法を参考になっている。
- (2) 文部科学省『平成 29 年版小学校・中学校学習指導要領（国語）』
- (3) オンラインによる ICT 活用の工夫については、日本国内の教員養成課程学生を対象に書道オンライン指導の実践を行っている富山（2020）、廣瀬（2020）を参考にした。

(4) 幻冬舎のカードゲーム『へんなかんじ』（2021）を参考にした。

引用参考文献）

- 富山敦史（2020）「教員養成課程における毛筆書写実技の指導－楷書技能を向上させる基本ポイント」『教育研究実践報告誌』第 4 号第 1 号、pp.9－18
- 馬場裕子（2019）「留学生教育コースにおける日本文化理解授業：日本文化書道実践報告」『日本語・日本文化』第 46 号、pp.115－128
- 馬場裕子（2021）「日本文化としての書道につながる漢字語彙指導：留学生教育の実践より」『間谷論集』第 15 号、pp.111－122
- 林朝子（2008）「日本語教育書字指導での筆ペン使用の有効性－タイ人学習者を対象としたパイロット調査から－」『日本語教育方法研究会誌』vol.15 No.2
- 林朝子（2010）「毛筆を生かした漢字指導の試み－“読みやすい”漢字書字に向けて－」『三重大学教育学部附属教育実践総合センター紀要』第 30 号、pp.31－37
- 林朝子（2011）「文字指導における書道活動－タイ人日本語学習者への文字群指導を通して－」『国際交流基金バンコク日本文化センター 日本語教育紀要』第 8 号、pp.85－94
- 林朝子・シューショートケオ・サランヤー（2022）「海外と結ぶオンライン書道の実践と課題－タイ人日本語学習者を対象とした取組から－」『三重大学教育学部紀要』第 73 巻、pp.275－280
- 廣瀬裕之（2020）「Zoom を用いた書写書道に関するオンライン授業の実践－新型コロナウイルス感染症流行時における本学での取り組み－」『書写書道教育研究』第 35 号、pp.71－76
- 福光敬子（2005）「留学生にとって「書道」は？」『大阪外国語大学留学生日本語教育センター授業研究』vol.3、pp.121－136
- 福光敬子（2020）「留学生を対象にした書道授業の報告：平成 15 年からの 17 年間をふりかえって」『大阪大学日本語日本文化教育センター 授業研究』18、pp.33－54